

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320022

研究課題名(和文)現代中国思想史構築のための中国知識界言説研究

研究課題名(英文)A Research on Chinese Intellectual Discourse for Constructing the Intellectual History of Contemporary China

研究代表者

石井 剛 (ISHII, Tsuyoshi)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：40409529

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,900,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果は次のように要約できる。

1) 中国で最も影響力のある学術雑誌『開放時代』及びその学術委員会を構成する中山大学の研究者と協力関係を構築した。それにより、中国の知的生産の現実についてより深い理解を得た。2) 同時代思想の認識方法を批判する視座を得た。日中間の歴史的・政治的条件において、認識方法自体が研究者が自覚すべき問題を不可避的に含むと結論した。3) 中国の周縁的側面に注目し、国民国家の枠組みで中国研究を行うことの限界を明らかにした。本研究に関してはすでに論文や書籍が出版されており、今後もさらなる出版が予定されている。将来は、東アジア横断の学術ネットワークが形成されることを期待したい。

研究成果の概要(英文)：We can summarize our achievements as follows.

1) We established the academic partnership with Kaifangshidai, the most influential academic journal in China, and some scholars in Sun Yat-sen University who belong to the advisory board. The partnership enabled us to deeply understand the situation of intellectual production in China. 2) We acquired a reflective approach for recognizing contemporary intellectual discourse. We concluded that given the specific historical and political conditions between Japan and China, the means of recognition itself inevitably contains challenges that scholars ought to be aware of. 3) By shedding light on the relevant thoughts produced in areas along China's periphery, we clarified the limitation of studies in China, which only focus on the framework of the nation state. We have already published and will continue to publish articles and books regarding this topic. In the future, we expect to establish a trans-East Asian academic network.

研究分野：中国近現代思想史・哲学

キーワード：中国 現代思想史 東アジア 知識界 言説分析 中国認識 現代と伝統 改革開放期

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 前身

本研究の前身には、「世紀交代期中国の文化転形に関する言説分析的研究」(基盤研究(B)、2009年度~2011年度、研究代表者は砂山幸雄)がある。「世紀交代期」という表現からもわかるとおり、この研究は、20世紀末から21世紀初頭の中国文化を主な対象として行われたものである。その時期は、国有企業改革が1990年代末より始まるなど、中国における国家資本主義的市場経済の基礎が形成された。この研究は、1990年代から始まった市場化のなかで変化する中国現代文化の諸相を言説分析という方法で分析しようとしたものであった。

### (2) 本研究の位置づけ

本研究はこの「世紀交代期」研究における成果と蓄積を継承しながら、より包括的に1970年代末から始まる改革開放後の現代中国史を思想的視座において総合することを目指して立案されたものである。とくに本研究の開始時期には、改革開放政策以来の高度経済成長の弊害が経済格差の増大、環境問題の深刻化などにおいて深刻さを増すとともに、GDPにおいて世界第二位の経済大国になった中国が、一方で共産党による専制的支配の構造を維持する中で、政権の正統性がどのように説明されるのかが厳しく問われるようになってきた。そうした中でこそ、インターネットディプリナリーな思想研究が必要であると認識された。

## 2. 研究の目的

ディプリンベースの現代中国研究は幅広く、かつ奥行きを深めながら行われている。しかし、一方で、個々のディプリンの枠を超えた公共言論が各種雑誌やインターネット空間で広く共有されている中国の思想空間の動向を総合的にとらえる研究はあまり行われてこなかった。アクチュアリティへのコミットメントを辞すことなく思想言説を繰り広げる伝統の豊かな中国知識人たちの生態を理解することが、中国同時代社会理解のために不可欠であるにもかかわらず、それは決して十分ではなかった。

本研究の目的は、まさにそうした重大な空白を埋めることにあった。そのために、「知識界」というタームを設定して、中国の人文社会的公共言論生成の場を前景化しながら、改革開放政策実施以降30年を超えた中国の知識界における言説史を総合的に研究し、中国現代思想史ナラティブを構築することを本研究の目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) インターディプリナリーな言説研究

上記の目的に鑑みて、本研究には、思想史・哲学、歴史学、政治学、文学、映画史、ジェンダー研究、法制史、国際関係論といった人文社会科学系の多様なディプリンか

ら研究者が集まり、研究分担者を構成した。

ただし、この中には、統計的調査やフィールド調査に従事する研究者は含まれていない。それは、本研究があくまでも「知識界」という言説ベースの対象へのアプローチを志していたからである。

今日では、中国社会の末端に及ぶ社会の現実直に触れる機会は、十数年前に比べて飛躍的に増大し、その結果、エスノグラフィーをはじめとして現地調査に基づく良質な研究が多く生産されている。その一方で質量ともに欠落しているのが、そうした現場性からは距離を置いた俯瞰的な場所において形成される知的言説に対する研究である。しかし、その領域こそが、現場を認識する枠組みを提供している空間であり、それを理解すること抜きにして、生の現場にアプローチするだけでは、現場性の思想的意義は明らかにならない。本研究の意義はこの意味において強調されるべきであると考えられる。

### (2) 研究対象

研究対象としては、『読書』、『天涯』、『開放時代』、『南方週末』などの印刷メディアや、「學術中華」、『思と文』、『当代文化研究』などのインターネットサイトがインターディプリナリーな知識界言説の場として想定されていたほか、中国知識界を代表する知識人たちとの研究交流による視点共有を図った。

### (3) 変化する言説生産の場への対応

発足当初の想定とは異なった点もある。それは、知識界言説空間としての既存メディアの急速衰退である。印刷メディアの危機がインターネットの普及と比例して増大しているのは世界的な傾向であろう。それに加えて、上記のインターネットサイトもSNSの普及とともに急速に衰えた。それに加え、国家による言論統制も当初の想像を超えて厳しくなり、インターネット空間での公共言論はもはや、オープンな場ではなく、SNS(特に「ウィチャット」と呼ばれるメディア)の私密的空間に移行している。知識界言説は、公共領域では商業的需要や制度的要請(学術成果評価の数量化)に基づく出版が継続的に増加する傍らで、鋭い言論ほど開かれた公共空間から閉じた私密的空間のなかで共有される傾向が昂じてきた。そうした中で、2000年代半ばまでは様々なトピックにおいて時に激しい対立を生みながら活発に展開されていた知識界言説は、ここ数年の間に急速に周縁化していくことになった。その原因は単純ではなく、中国国内の言論環境が時の政策によって大きく左右される現実も作用しているのは否めないが、そうした現実が生じてきた背景を理解するためには、経済のグローバル化とインターネットの普及をベースとする世界的な状況変化をとらえるマクロな視点が不可欠であることは言うまでもなからう。そして、上記の知識界言説空間の遷移を考慮するならば、単なる公共言説分析のみな

らず、知識界内部の学術思想交流のネットワークの内部と直接つながる回路を持つ必要がある。グローバルなネットワークの時代にあつてこそ、顔の見えるコミュニケーションにおいてしか共有されない「思想生成の場」へのアプローチが不可欠でかつ有効となる。

#### (4) 中国認識の再調整

本研究を進めていく中で、中国をいかに認識するかという問題が生じ、それに相応する方法論の調整が行われた。特に重要なのは、中国現代思想史を国民国家としての中国内部の問題として認識することよりも、むしろ、第二次世界大戦後の東アジア地域関係の中で、トランス・ナショナルに把握することが必要かつ有益であるということである。

とりわけ、日本での中国研究においては、戦後日本における対中国認識の枠組みを反省的に振り返りながら、現代中国思想が東アジアの地域的秩序の中にどのように位置づけられるかを考察することが、現代中国に対する理解のみならず、そうした理解を基礎づける枠組みをも同時に問題化するためにも必要であることが、本研究の深化とともに明らかになった。増淵達夫の同時代史研究批判の意味を再度問い直したのは、そのような方法論的自覚を明確にするための必要なステップであった。

また、中国に返還されたとは言え、政治的にも歴史的にも多重なアイデンティティを潜在的に有する香港の思想史状況を視点に組み込んだのも、こうした理解の延長から生まれてきた新たな方法論であると言える。

#### 4. 研究成果

以上で記したように、本研究の発足当初から今日に至るまでの間に、中国の知識界を巡る状況は少なからぬ変化を経た。その中で、本研究においては、以下のような成果を得ることができた。

##### (1) 『開放時代』との連携、関連成果の出版

まず、本研究が当初行おうとしていた方法がメディアにおける言説分析であったことから、今日、中国知識界で最も広範な影響力を持つ人文社会系雑誌『開放時代』との研究協力体制を構築した。2013年には東京で同誌の編集長と学術委員会の中心メンバーを招聘してシンポジウムを行ったほか、2015年にはその発行地である広州にて、第2回の学術会議を行った。2013年会議については、『開放時代』2013年第5期および『中国 社会と文化』第29号(2014年)のそれぞれにおいて小特集が組まれた。2015年の広州会議についても『開放時代』に特集が組まれる予定である。

##### (2) 同時代史研究に対する方法論的考察

そのほか、2013年に北京で行われた「日本における東洋史研究の回顧と省察」会議で扱われた中国経済史家増淵達夫の著作『歴史家の同時代史的考察について』について、この会議を機に中国語訳出版を目指すことが決

まり、訳出作業が進められている。早期の出版を期したい。この増淵達夫研究においては、中国の同時代思想にアプローチするために不可欠な認識の枠組みが、常に何らかのプロブレマティクをうちに含まざるを得ないことが再度確認された。それは、上でも述べた方法論的自覚の問題であると同時に、中国知識界のなかでも大きな影響力を持つ現代史研究が有する批判的な意義と課題を、相対的に明らかにするためにも有益なアプローチであった。同様のインパクトと意義を持つ研究として、2014年に行われた「章炳麟解釈史と現代思想史研究の批評的検討」ワークショップ(東京大学・東京都目黒区)がある。その中の一部の発表は、中国で三聯書店より刊行予定の『亜洲現代思想』に収録されることになっている。

##### (3) 香港現代思想史、そして周縁的視座

また、2014年に行われた「誰も知らない香港現代思想史」会議(明治大学・東京千代田区)をもとにした『誰も知らない香港現代思想史』(羅永生著、丸川哲史・鈴木将久・羽根次郎訳、共和国)が2015年に出版された。

これは、中国という国民国家を周縁から問題化する試みの一つと言えるものであるが、類似する視点を取り入れたものとして、韓国における同時代中国思想史研究の動向を知るために、韓国人研究者を招聘したほか、中国における歴史認識を日本との関係で理解するためにアメリカ在住の中国人研究者を招聘することができた。

##### (4) 今後の展望

『開放時代』との協力関係は、そのアドバイザーボードの中心メンバーが多くいる中山大学(広州)との学術協力関係強化に向かって今後、発展していくことになる。

この4年間における知識界言説の中では、現代中国の社会主義政権としてのレジティマシーと伝統学術・文化との関係をどう理解するかという問題がますます喫緊の課題となってきた。同時に、伝統学術を再考することは必然的に、前近代における漢字圏文明に対する認識を新たにすることを含意しており、もはや、ナショナル・ヒストリーの枠内に中国現代思想史研究を囲い込んでおくことには限界がある。以上を踏まえた上で、中山大学の研究者とともに、日中韓の研究者ネットワークを構築して、中国知識界言説を東アジア的パースペクティブのもとでとらえ直す必要性が確認された。台湾・香港も含んだ東アジア現代思想に関する横断的研究が今後は強く望まれる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計28件)

村田雄二郎、近現代東亜の四個“戦後”、南国学術、査読なし、5-3巻、

2015年、11-15ページ(中国語)  
加治宏基、米国が規定した「中華民国」の対外援助政策：キッシンジャーの“中国論”が暗示した課題、中国21、査読あり、42巻、2015年、173-184ページ  
加治宏基、だれが中国の「安全」を保障したのか?：国連「中国代表権」獲得にむけた対外援助政策、愛知大学国際問題研究所紀要、査読あり、145巻、2015年、45-66ページ  
佐藤普美子、用身体去思考：当代詩歌如何表達“現實感”、漢語言文學研究、査読あり、4-1巻、2013年、103-109ページ(中国語)  
村田雄二郎、超越“紀念史学”：日本紀念辛亥革命一百周年国際会議記、解放時代、査読あり、3巻、2013年、188-197ページ(中国語)  
高見澤磨、市民社会形成過程の観点から見た最近の中国法の動向：結社の自由と無罪の推定を中心に、季刊中国、査読なし、115巻、2013年、15-26ページ  
坂元ひろ子、劉曉波「現象」所感、中国研究月報、査読あり、67-1巻、2013年、38-44ページ  
高見澤磨、中国の法学にとっての日本、法の支配、査読なし、168巻、2013年、11-19ページ

〔学会発表〕(計47件)

石井剛、Li Zehou's Aesthetics and Confucian "Body" of Chinese Cultural Sedimentation、"Li Zehou's and Confucian Philosophy" Symposium、2015年10月8日から10日、ホノルル(アメリカ)(英語)  
石井剛、歴史負載と「文」的实践：武田泰淳「世界構想」的挫折と転化、「東亞人文学的可能性」学術会議、2015年7月19日から20日、広州(中国)(中国語)  
村田雄二郎、在現代東亞の四個“戦後”、「東亞人文学的可能性」学術会議、2015年7月19日から20日、広州(中国)(中国語)  
村田雄二郎、National Wealth without Military Strength?: The Four Postwar Eras in Modern East Asia, China and Japan, 1895-2015: History of Rivalry, War, Peace, and Hostility、2015年6月26日、香港(中国)(英語)  
アンニ、戦後日中映画交渉試論、日本映画学会シンポジウム、2014年12月6日、大阪大学(大阪府・吹田市)  
石井剛、仏声、革命、国故：章太炎

思想的定位問題在日本學術思想史中的表現、「章炳麟解讀史と現代中国思想史研究の比較的検討」ワークショップ、2014年11月29日から30日、東京大学(東京都・目黒区)(中国語)  
石井剛、批評的史学、史学的批評：日本現代史学理論的自我反思、「日本東洋史研究の回顧と反思：以増淵達夫的研究と思考為中心」シンポジウム、2013年11月30日から12月1日、北京(中国)(中国語)  
坂元ひろ子、歴史家増淵達夫：内在理解と冰心之姿勢、「日本東洋史研究の回顧と反思：以増淵達夫的研究と思考為中心」シンポジウム、2013年11月30日から12月1日、北京(中国)(中国語)  
村田雄二郎、対増淵達夫の再思考、「日本東洋史研究の回顧と反思：以増淵達夫的研究と思考為中心」シンポジウム、2013年11月30日から12月1日、北京(中国)(中国語)  
竹元規人、簡論増淵達夫の同時代史的考察、「日本東洋史研究の回顧と反思：以増淵達夫的研究と思考為中心」シンポジウム、2013年11月30日から12月1日、北京(中国)(中国語)

〔図書〕(計14件)

坂元ひろ子、岩波書店、中国近代の思想文化史、2016年、298ページ  
黄宗智、李集雅、章永榮、于治中、王斑、王德威、石井剛、甘懷真、林少陽、楊立華ほか、東方出版社、探尋中国的現代性、2014年、420ページ(123-141ページ、270-296ページ)(中国での出版、中国語)  
高原明生、丸川知雄、伊藤亜聖、村田雄二郎、平野聡、川島真、松田康博、関志雄、高見澤磨、園田茂人、阿古智子、東京大学出版会、東大塾社会人のための現代中国講義、2014年、288ページ(59-81ページ、209-236ページ)  
趙景達、原田敬一、村田雄二郎、安田常雄、中野利子、中村元哉、何義麟、石田憲、山田賢、江田憲治、水羽信男、轟莉莉、砂山幸雄ほか、有志舎、講座東アジアの知識人5 さまざまな戦後、2014年、420ページ(300-316ページ)

〔産業財産権〕

該当なし

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
該当なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石井 剛 (ISHII, Tsuyoshi )  
東京大学・総合文化研究科・准教授  
研究者番号：40409529

### (2) 研究分担者

砂山 幸雄 (SUNAYAMA, Yukio )  
愛知大学・現代中国学部・教授  
研究者番号：00236043  
坂元 ひろ子 (SAKAMOTO, Hiroko )  
一橋大学・社会学研究科・特任教授  
研究者番号：30205778  
佐藤 普美子 (SATO, Fumiko )  
駒澤大学・総合教育研究部・教授  
研究者番号：60119427  
村田 雄二郎 (MURATA, Yujiro )  
東京大学総合文化研究科・教授  
研究者番号：70190923  
高見澤 磨 (TAKAMIZAWA, Osamu )  
東京大学・東洋文化研究所・教授  
研究者番号：70212016  
アン ニ (YAN, Ni )  
明治学院大学・文学部・研究員  
研究者番号：70509140  
竹元 規人 (TAKEMOTO, Norihito )  
福岡教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80452704  
加治 宏基 (KAJI, Hiromoto )  
愛知大学・現代中国学部・助教  
研究者番号：80553487

### (3) 連携研究者 該当なし ( )

研究者番号：